

〈在學生、公開講座受講生、現職教員から〉

「忘れず、囚われず」

横山 健聡（日文修士二年）

私は中学、高校、大学とバドミントンをしてきた。もちろん楽しくて続けているのだが、思い通りにならないことばかりでつらいことも多々ある。打ちたい場所に打てない。相手の打球をきちんと返せない。シャトル（羽根）がラケットにうまく当たらない。これらの失敗は起こった次の瞬間、すぐさま「過去」になる。過去を振り返る事は大事である。バドミントンに限らず、生きていく上で過去の反省からしか得られないものも多い。だが、過去にこだわりすぎても先には進めない。過去の事を忘れず、しかし囚われず。過去を糧として成長しようとする事で人は前に進むことができる。バドミントンを通して学んだことの一つである。

「忘れず、囚われず」。このことが今、改めて実感されるようになったのは、修士論文に取り組んでいたからである。論文を書いていく上で欠くことのできないものの一つに先行研究がある。例えば、ある作品について論じようとす

る時、自分が論じる以前に誰がどのように論じているのかを理解しておく必要がある。過去における研究を理解することによって、もう論じる必要のないもの、さらに踏み込んで論じる必要のあるものを知る事ができる。つまり、ゼロから論じ始める必要がなくなるわけである。その恩恵にあやかつて今日の我々は研究を進めることができる。

さて、研究という響きから、以前の私は随分近代的なものを想像していたのだが、古典の研究はるか昔から行われていた。例えば『万葉集』は平安の頃より読み方の研究が行われていた。このような研究が幾世にも渡り積み重ねられた結果、現代の我々は、読み易い文庫本として訓が付けられ、活字化された『万葉集』を見ることができ。また、『万葉集』に詠まれている歌の詞は現代人にとって理解に難い詞も多い。だが、いにしえより積み重ねられてきた歌の詞・内容についての研究によって、我々も歌の意味を理解することができる。

しかし、単に過去の研究に縋つたままでは学問に発展はない。さらに一步を踏み出そうとする姿勢が必要である。先行研究を理解しながら自分自身でその論が信用できるか判断し、取捨選択して吸収していく。これまでの研究成果について理解が深まったとき全く違う論文同士が実は同じようなことをいつていることに気付く事がある。全く違うことを述べているものでも視点を交えることで、それらか

ら新たな理解を得る事もある。これらの論を私はどのように判断し、この問題についてどう考えるのか、それが私の論となる。また、矛盾する点に気付き新たな問題が浮上する事もあるだろう。それをいかにして論理的に無理なく説明づけるか、これも私の論となる。この時私は論と論を「繋いだ」のであり、それと同時にこれまでの研究成果をまた次の研究者へ「繋いだ」事になる。これは例え話であつて、実際に私がこれまでの研究を繋いでいけるような大層なことをしているのかという事とは別問題であるが、ともかくこうして何世紀にも渡つて繋がれてきた大いなる遺産を享受し、そこからさらに突き詰めていこうとする研究者達の不断努力、貪欲な探求心によつて学問は発展してきたのである。

ここまで述べてきたような事はごくごく当たり前の事で、わざわざ大層に書くのもおかしい事であろう。しかし私は今研究を進める中で、ようやくこの様な事を実感するに至つた。今日まで真理に向かつて研究を繋いできた研究者達への敬意と、己への戒めの意を込めてこのような事を書かせていただいた。「忘れず、囚われず」これからも精進したいと思う。

大学院での日本語日本文学研究の「今」

佐方 章子（日文修士一年）

大学院と聞くと難しいというイメージを抱く人が多いかもしれない。確かに学問における最高機関である大学の一段階、上に行く場であるので、そう思われて当然だろう。実際、大学院は学問に関して決して生易しい所ではない。少し砕いて言うならば、四年間、大学で学んだことを踏まえつつ、そこから一歩進み、自分の研究を深める所である。私の在籍する日本語日本文学研究科には、文法や語彙などの日本語学を専門とされる先生方が三名、上代から近世までのそれぞれの時代を専門とされる先生方が四名いらっしゃる。講義や演習などは少人数で行われ、きめ細やかな指導を受けることが出来る。地方において、このように充実した指導を受けられる所は少ないだろう。

学生については、内部（学部）からそのまま大学院に進んだ人、社会人、留学生などの二年生五名、一年生七名、計十二名が在籍している。それぞれの研究分野は異なるが、日本語学、日本文学、日本語教育等をより専門的に学びたいという共通の意思を持ち、お互いに刺激し合いながら日々、勉学に勤しんでいる。研究とは孤独な作業であるが、その

合間に仲間と語り合うことも多く、和気藹々とした雰囲気である。

そんな中で今、私が研究している人物は熊本出身の「中島広足」という幕末の国学者である。父親を早くに亡くした広足は十五歳で細川藩の御小姓役（側仕え）を務めるが、病のため、二十四歳という若さで隠居し、その後は学問に専念することとなる。しかし熊本に在した壮年期はあまり恵まれず、長崎へ移住した後に花開くこととなる。国学だけでなく和歌においても非常に多くの作品を残し、日本語学の分野では辞書の増補を手がけるなど、彼の多才ぶりがうかがえる。残念ながら地元である熊本において、広足はまだよく知られていない。それは彼の受け継いだ国学がどのようなものであったか、肥後の国学者として広足がどのような位置にいたのか明らかにされていないためであろう。今後は彼の残した和歌、学問、思想などについても、より深く掘り下げて論じて行けたらと考えている。そしてもっと多くの人に、この地元の偉大な人物を知ってもらおうことが今の私の目標である。

日本語日本文学研究科の大学院生はこのような研究以外にも、例えば日本語日本文学会の運営や、日本語日本文学会会報の発行、さらには学生の自主研究事業（最近では三年計画で美里町のお寺の古文書を読む活動を行っていた）の中心となつて動くなど、日文の中心的役割を担っている。

大学院生とは学部生の見本となる、また先生方にとつても頼り甲斐のある存在といえるだろう。今後も日文を盛り立て、学問に対して高い志を持つ後輩が後に続いてくれることを切に願う。

私の原点——フェアトレードくまもと

宿里 京子（英文四年）

私には、「原点」と呼ぶことのできる場所がある。幾度となく悔しさに涙を流し、自分の未熟さを情けなく感じた場所、NGO「フェアトレードくまもと」である。もう一歩、もう一歩と思いつながら前に進もうと無我夢中でがんばった。ただ楽しいだけではなかった。しかし、この場所があったからこそ今の自分があると胸を張って言える。

「フェアトレードくまもと」は、「フェアトレード」を通じた国際協力を行っている団体である。「フェアトレード」とは、買い物を通じた国際協力である。寄付とは違い、お金ではなく仕事を経済的に貧しい人々に提供する。製品を作る人、買う人、環境に優しい十の基準に基づいた国際協力の形である。「フェアトレードくまもと」では、バザーやフェアッションショー、出張講義などを通じてフェアトレードを多くの人に知ってもらう活動を行っている。

その一環として、熊本市内の大学生が中心となって「フェアトレード・スチューデント・カフェ はちどり」を運営している。私はこのカフェにオープン当初から携わっている。二〇〇五年夏、カフェはちどりの初めての会議が開か

れた。国内では例を見ない学生が運営するフェアトレードのカフェである。フェアトレードくまもと代表の明石祥子さん、フェアトレードでコーヒーを輸入するウィンドファームの矢野さん、そして五人の学生が集まった。学生は少しずつ自分たちの理想のカフェのイメージを口にする。「コーヒーを飲む人にフェアトレードのことを知ってほしい。」「おいしいコーヒーを出したい。」「生産地のことをお客さんに伝えたい。」だが、私は不安でいっぱいだった。コーヒーの入れ方もわからない、フェアトレードの詳しい知識もない私たち学生にカフェなどできるのか。そんな胸いっぱい不安で始まったカフェだった。

二〇〇五年十二月、ついにカフェがオープンする。私はこの時期にフェアトレードくまもとの学生代表に立候補した。どうせやるなら精一杯やろうという気持ちからであった。実際にカフェが始まると、これでもかというほどに続々と問題が出てきた。カップが足りない。スプーンが足りない。コーヒーマシンの使い方がわからない。シフトがなかなか埋まらず、カフェを開けられるか前日までわからない日も少なくなかった。さらに、一番大切であるはずのメンバーの気持ちさえも一つではなかった。学生をまとめる立場にありながら、その役目をなかなか果たせていなかった。二年生で学生代表となっていた私は、年下、同い年のメンバーだけでなく、年上のメンバーをもまとめなければ

ならなかった。年齢の近いメンバーや先輩に指示を出したり、注意をしたりすることは簡単なことではなかった。うまく伝わらずに雰囲気が悪くなること、志気を下げたしまうこともあった。

祥子さんがかけてくださった言葉が今でも忘れられない。メンバー一人ひとりに電話してもどうしてもシフトが埋まらず、相談の電話をしたときのことである。どうしてもいいか分からず、涙ながらに話す私に、「今は辛くてもでも前に進んでいけば必ず道は開けるのよ」とおっしゃってくださいました。この言葉があったからこそくじけそうになっても前に進むことができた。祥子さんがいらつしやらなければ、このカフェの構想もなかった。大学生のこの時期に一つのこととに打ち込み、真剣に取り組む場をもてたことには感謝しても仕切れない。どんなときでも未熟な私たち学生にアドバイスをくださり、叱咤激励してくださいました。このカフェの名前が「はちどり」に決まったのも祥子さんのおかげである。「はちどり」という名前は、南米に伝わるお話しに由来する。森の動物たちが逃げていく中ただひたすら一滴ずつ水を運んで山火事を消そうとする一羽の「はちどり」のお話である。このはちどりのように私たちも私たちにできることをやっていこうという気持ちがかめられていく。スタッフの間の小さな悩みで、「はちどり」の名前に恥じるわけにはいかない。そんな高い志をもてたのはこの名

前があったからである。

このカフェでの経験を通して私は困難を乗り越える強さを知ることができた。それだけではない。ものの見方、考え方、生き方、生きていく上で基礎となる全てのものをここで学ぶことができたと思っている。私の将来の目標は、中学校で教師として働き、私が学んできたことを子供たちに伝えることである。それが私にできる恩返しだと思う。

フェアトレードくまもと 096 - 362 - 4130

ドイツ語の公開講座を受けて

谷川 馨（公開講座受講）

平成十六年に、ライベルト先生の「実用ドイツ語Ⅰ、Ⅱ」を受講し、翌年「実用ドイツ語Ⅲ、Ⅳ」、昨年からは、元吉先生の「ドイツ語Ⅲ、Ⅳ」、引き続き、「ドイツ語Ⅴ、Ⅵ」を受講させて頂いています。学生時代、教養課程で「ドイツ語」を学びましたが、当時、私はドイツ語やドイツ語圏の国々に全く興味がなく、覚えていたのは、定冠詞の格変化くらいで、ドイツ語の文法は難しいという印象だけでした。そんな私が、五年前に、再びドイツ語を学ぼうと思っただきっかけは、一人のドイツ青年との出会いでした。平成十二年、当時高校生だった長男が、熊本市と姉妹都市であるハイデルベルグに、青少年交流使節団の一員としてドイツを訪れ、その翌年、ドイツの高校生が熊本へやって来ました。その折、ホストファミリーとして、一人のドイツ人を受け入れました。彼は、とても礼儀正しく、自分の考えをきちんともった青年で、日本や日本の文化にも大変興味があり、初めて会ったばかりなのに、実に様々なことを、国籍や世代を超えて、当時、二人の共通語であった英語で話し合いました。私が言葉に詰まると、辞書を引いて探し

出すまでじっと待ってくれました。私は、その時初めて、異文化の人と話す楽しさを味わいました。そして、このような青年を育むドイツという国に、とても興味がわきました。その後、彼は日本語を（昨年一年間、京都大学に留学）、私はドイツ語を学び始めたのです。

公開講座の授業では、学生達と一緒に、私達社会人も学ぶわけですが、決してお客様としてではなく、学生と同じように授業に参加することを求められます。ですから、授業のための予習や復習も、きちんとやる意欲がわきます。特に、元吉先生の授業では、ドイツ語の文法を丁寧にご指導下さり、とても分かりやすい解説で、毎回、「成る程、そうだったのか」と、頷くことばかりです。授業の第一回目に、先生が、「ドイツ語は、文法をきちんと押さえておかないと伸びません。」と、仰しかったことを、ひしひしと感じています。

以前は、長い文章はパズルのように私の前に立ちはだかっていましたが、文法の理解を深めることにより、その長い文章を紐解いていく鍵を、少しずつ手に入れつつあるような手ごたえを感じています。そして、ライベルト先生の授業で「ドイツ事情」（言語、習慣、社会、政治、教育、民族、宗教など）を学ぶことにより、ドイツ語の理解（ドイツ人のものの見方、考え方を含む）をさらに深める相乗効果が

あることを感じています。最近では、新聞、雑誌、テレビや映画など、ドイツに関連のあるものに、すぐに目が行くようになりました。例えば、ドイツにおける少子化問題や環境問題に対して、ドイツ政府がどのように対処しているのか。では、日本においてはどのような対策が講じられているのか等、常に、自分（我が国）を見つめ直すきっかけになっています。また、今春上映された映画「善き人のためのソナタ」（旧東ドイツ時代の国家保安省の監視体制下における人間ドラマ）について、ドイツ人講師ライベルト先生（旧東ドイツ出身）と授業の枠を超えて、いろいろな意見を交換し、とても有意義な時間を持つことが出来ました。私達は、ともすれば、メディアが切り取った一面面を、全ただと勘違いする危険性を常に持っています。先生との会話から、そのことに気付かせていただきました。また、「ドイツ語」を学んでいると、必ず、ヨーロッパの歴史にも関心が出てきます。国というものは（そもそも、国という線引きが時代と共に刻々と変わって来ましたが）、特にヨーロッパは、一国では成り立ち得ません。言語、文化、政治全てが、他の国々との関わりの中で形成されて来ましたが、昨夏、「ハプスブルグ一千年」という本を読みました。これは、中世から近世にかけてのヨーロッパの歴史でもあります。神聖ローマ帝国の実態や、各国との繋がり、オスマン・トルコとの関係など、興味のつきないものでした。今年四月、大阪で、ウィーン国立歌劇場版ミュージカル「エリーザベ

ト」（オーストリア・ハンガリー帝国后妃）が、全てオリジナル・ドイツ語ヴァージョンで興行されました。そして、その公演を観ることが出来ました。もし、ドイツ語を学んでいなければ、ハプスブルグ家の歴史を読んでいなければ、こんなに感慨深く味わえなかったことと思います。

何故、この歳になって「ドイツ語」を学ぶのか。全ての言語学習者に共通することと思うのですが、その言語を学ぶことを通して、私達の人生を豊かにしてくれるものが、そこには宝の山のように横たわっているからだと思えます。この公開講座は、私に、その「宝の山」への扉を開けてくれました。講座をきっかけに、新たな興味や関心が次々と湧いてくるのです。今後は、この講座を続けながら、文学作品や、芸術、音楽などを、ドイツ語でじっくり味わいたいというのが、私の夢です。しかし、ワインに熟成の時があるように、それを愉しむ側にも、それにふさわしい準備が必要なことも痛感しています。その準備の手助けを下さるのが、まさしくこの公開講座なのです。

そして、私達の人生を、本当の意味で豊かに送ることが出来るよう、その機会を与えて下さった、この公開講座及び先生方、そして、学びあう仲間達に感謝しています。

平成十九年 夏

（昭和五十二年熊本大学卒業）

先達が残したもの

梅林 誠爾(哲学)

大学を退職する際には、新しく着任してくる者のことを考えて、研究室をきれいに掃除して、何も残さずに去るのが、どちらかといえばよいだろう。しかし、中には、そのようなことに気を使わずに、色々なものを残して退職していく人もいる。ところが、その残されたものの中には、意外な掘出し物や、それを使った人々の足跡を思い起こさせる品々があつて、なかなか棄て難い。

私が、熊本県立大学、当時の熊本女子大学に採用してもらつて着任したのは、今から二十八年前、本学が大江渡鹿から月出の現在地へ移る一年前、昭和五十四年のことであつた。「これがきみの研究室だ」といつて案内された部屋は、本館の玄関入り口の階段を昇つた二階、学長室のすぐ横にあつた。そこは、前任者の佐藤公一先生や柿村峻先生が使つておられたようだが、入つてみると古道具屋の様であつた。木製の古い両袖机は、表面のニスがかなり剥がれて光沢は失われ、湯飲みの痕やインクのしみがついているが、なかなか味わいがあつた。ラベルには、昭和二八年四月二七日取得とある。他に、スチール製の両袖机もあつたが、この

どつしりとした木製机を今でも愛用している。

布張りの大きな肘掛け椅子が二脚あつた。簡単には手に入らない代物だったが、前任の方々が使ひ古して、布の破れ目からクッションの藁やバネが見え隠れしていたので用心して座る必要があつた。学園祭(「白亜祭」)の頃になると、よくESSの皆さんがやつてきて、椅子を英語劇の小道具に使いたいと言う。学園祭が終ると、椅子は、御礼の手紙や時には菓子包みと一緒に、研究室に帰つてきた。この春だつたと思うが、環境共生学部の先生がやつてきて、「木の生活展」のためにこの椅子を使いたいと言う。木製の肘掛け椅子は、今はその生活展で働いているはずだ。

さらに、木製本棚が三つ、ガラス戸付きのスチール製や木製の本棚が三つ、スイッチを入れると唸り声を上げて回転する壁掛け式の扇風機が一つ、砂が入つた防火用バケツが二個、石油ストーブが一つ、ガリ版刷りの謄写版、乾燥した朱肉の固まり、錆びたペン先、大きな座敷帚と塵取り、それに古道具屋の必需品であるハタキが二本、部屋はそういったものでいっぱいだった。

『熊本女子大学ニュース』創刊号

机の引き出しや本棚の隅からは、面白そうな書類も出てきた。中でも興味を引くのは、B4の更半紙に活版印刷の『熊本女子大学ニュース』創刊号、第二号、第三号である。創刊号【写真一】の日付は、「一九四九年十一月十日」

【写真1】



となっている。熊本女子大学開学の年の発行である。一面には、北村直躬学長や桜井三郎知事、熊本県婦人会の長野千鶴子氏が開学を祝い女子高等教育の意義を述べた言葉が並んでいる。さらに、「活気を呈した開学記念祭」という記事には、開学初年の熊本女子大学の建物、すなわち熊本城内の旧陸軍第六師団司令部の建物の前で開かれた開学記念祭（五月二十一日、二十二日）の写真が付いている。「本学の沿革、遡ること三十年」は、「大正十年県立第一高女の上に設立された専攻科と一十四年から設けられた高等科」にまで、本学の歴史を遡っている。

開学初年のカリキュラムの紹介もある。文学科学生に關連する部分を中心に見ると、

新制大学の基礎案に基づいて、本学に於いても下記の如くカリキュラムが定められた。本学は現在文学科、生活学科の二科が設置されている。これは第二学年度から学科の選択によって文学

科においては、英文学、国文学に、生活学科においては、保健、栄養、料理、被服、育児等の学科についてそれぞれ専門的に進む予定である。

本学における一般教育科目は次の通りである。

人文科学関係…哲学、倫理学、心理学、美学及び美術史、文学、歴史学、宗教学、外国語一（英語）、外国語二（独語又は佛語）。

社会科学関係…法学、社会学、経済学、家政学、統計学。

自然科学関係…数学、物理学、化学、生物学、生理学。

増加科目…音楽概論及び音楽史、音楽実技。

また生活科学に於ける学科内容は、家政学概論、――。

次に文学科における学科内容は、

言語学概論、国語学概論、英語学概論、国語学史、英文法概論、

英語発達史、英語修辞学、国語音韻学、英語音声学及び音韻学、

ラテン語、実用英語、英語学演習、国語学演習、文学概論、国文学作品研究（一）（二）（三）、国文学史、英文学史、米文学史、

中国文学史、中国文学購読、英米文学作品研究（一）（二）、英米

文学特殊研究、英米批評文学、英詩概論、演劇概論、英米文学演習、

国文学演習、西洋史、西洋文化史、英米史。

教職課程科目

教育学概論、教育史概論、教育社会学、教育心理学、教育方法論、

教育実習等。

その他卒業論文。

六十年の歴史を経て、この科目表の中には、現在の文学

部の科目に受け継がれているものもあるし、姿を消した科目もある。また、英文・国文という区別とともに、言語・文学という区別を織り交ぜた科目編成になっているが、そうした科目編成の仕方、国文、英文の両学科成立と共に変化することになる。ともかくも、この科目表が、文学部の教育の歴史の出発点であった。

『ニュース』の二面では、学生生活が話題になっている。「第三回演劇コンクール、優勝『燈台』」という見出しの記事は、本学の前身である熊本県立女子専門学校の方々の活躍を報じている。

本年六月十二日例年の如く歌舞伎座に於いて、第三回学生演劇コンクールが行われたが、本学はその第一席に入賞し、なほ個人賞として、上田（英三）中村（生三）に演技賞が授与された。本学としての出演は最初であったが、第一回以来、女専の名のもとに、上田、中村、高岡、石淵等現三年の諸嬢が活躍し、初演『郭公』はその熱でかわれ、コンクール第一回での『おふくろ』も好評を博して優勝し、第二回目は棄権、今回に於いても『燈台』三島由紀夫作——を演じ優勝し、益々演劇部の名を高らかにした。この記事に載っている人々は、女専一回生（当時三年生）の方々のようだ。記事中の「歌舞伎座」は、辛島町か練兵町辺りにかつてあった熊本の歌舞伎座であろう。さらに、大学玄関前（つまり旧六師団司令部の玄関前）ののどかな「バトミントン競技風景」の写真があり、「秋色を探る——

京阪見学の記——」は、京都、奈良、大坂への女専一回生の皆さんの旅（十月二十四日～二十九日）の報告である。昭和二十四年の関西旅行は、大変であったろうと思う。また、学生自治会が七月十日に結成され、委員の顔ぶれも決まったという記事がある。さらに、「就業振るわず、今夏アルバイトの実態」は、夏のアルバイトが低調であったと心配している。

ところで、『ニュース』創刊号の発行所は「熊本女子大学学友会新聞部」、編集兼発行人は当時美学・美術史を担当されていた徳永郁介教授となっている。

『熊本女子大学ニュース』第二号、第三号

『ニュース』第二号は、残念なことに一面しか手元にならない。裏面は白紙である。校正のグラ刷りなのかもしれない。発行日は、「一九五〇年九月二〇日、水曜日」である。発行所や発行人は載っていない（次頁【写真二】）。まず報じられているのは、郷土文化研究所の発足である。「新に生れる四研究所、本学の肝入りで、郷土文化研究所・熊本生活改善協会・熊本産業科学研究所・熊本保健体育学事協会」という見出しであるが、記事を読むと、この時点で実際に発足したのは、郷土文化研究所のみようだ。記事は、

昨年来熊本に三つの大学が生れ文運の飛躍すべき時が来たのであるが、ここに県民と最も密接な関係を有する本学が世話となり学会その他廣く学識の士を糾合して各種の研究所（協会）が

【写真二】



本学内に誕生を見るに至ることは熊本文化史上特筆すべきことと、いわねばならない。

六月二十七日早くも発会式を挙げ活動を開始したのは肥後郷土文化研究所である。この研究所は先ず郷土の史跡はもとよりあらゆる文化財を尊重しこれが保存整備をはかり、それらの実証的検討をなすとともに、正しい郷土文化史を創生して新しい世代の抛るべき基盤を確立しようとするもので、――

と、郷土文化研究所の目的を語っている。そして、上代、古代、中世、近世のそれぞれの研究課題を列挙し、北村学長がその所長となり、熊本大学から六名、熊本短大から一名、白川中学から一名の先生方が、そして女子大からは圭室諦成教授（歴史学宗教学）、乙益重隆教授（考古学）が所員として参加し、幹事として熊本女子大学平山国廣氏、県社会教育課中島秀雄氏の名が挙げられている（なお、郷土文化研究所の詳しい歴史については、本特集集中、上河一之先生の「郷土文化研究所について」を（参照下さい）。

『ニュース』第二号は、記事の扱いが小さいが、もう一

つの大事件を報じている。それは、熊本城内から大江渡鹿への本学の移転である。「第二期工事すでに始まる」という見出しに、「図書館、教職員公舎など十四棟延六九七坪を年内に」、「第三期は体育館、物理学研究実験館など八棟延六〇一坪」という小見出しを付けて、「第一期工事を終えて、新装の校舎に学ぶ喜びも未だ新なる時、はつ秋の清涼の気をふるわせて、つちの音も軽やかに、二期工事は既に八月二十三日に始められた。現在出来上がって使用中のものは本館、第三号、第四号館で、緑色のスレートとクリーム色の壁、そしてきらめく窓々が明るく美しい。」と、七五調をまじえて語っている。そして、本館の写真が掲載されている。その写真には、三〇年後、私もお世話になる研究室の窓が写っている。この『ニュース』はその研究室にはまだないが、確かにあったのであり、しかし、いざれないことになるはずである。少しばかり眩暈を覚える。紙面の下段の昭和二五年の「行事歴」には、「一月十六日新校舎起工式（大江町渡鹿）――五月二九（三〇）日大江町新校舎へ移転、六月一日新校舎で授業開始」とある。

『ニュース』第三号（一九五一年七月五日）には、郷土文化研究所の続報「史料の基礎調査に乗り出す」がある。この続報では、「七月二十六日研究所設立」としている。さらに、「東から西から、卒業生の職場通信」という記事が目を引き。「本学の前身たる女専は二回の卒業生を出しただけ

で発展解消したが、いまその就職状況を調べてみると、昨年度卒業生八九名中就職希望者七四名、本年度四九名中四名、うち就職者五一名に一六名だから、希望者に対する比率からいうと、昨年度六割九分、本年度三割九分になり、新米の学校としては、むしろ好い方であろう。」と概況を説明し、卒業生からの通信が紹介されている。その中に、当時東京俳優座演劇研究所実習生で、後に英米小説翻訳者として活躍されることになる上田公子さん（英文卒）は、多忙な中にも楽しそうな俳優座実習生の研修生活を伝える通信文を寄せている。

なお、『ニュース』第三号の発行所は「熊本女子大学学生自治会」、編集兼発行人は富野悦子さんとなっている。大学発足初年とは違い、三年目ともなると、『ニュース』の編集発行は、学生の手任せられたのであろう。

『熊本女子大学ニュース』は、その他にも、本学発足前後の諸先輩の若々しく、元気な足取りを今日に伝えている。だが、長くなるので、このあたりで割愛させていただく。

『熊本女子大学新聞』

研究室の引き出しからは、『熊本女子大学新聞』も出てきた。これが、『熊本女子大学ニュース』とどのような繋がりになるのかは、分からない。ともかくも、引き出しから出てきた『熊本女子大学新聞』の中で最も古いのは、昭和二八年一月二一日付けの第六号（発行所 熊本女子大学、

編集兼発行人 熊本女子大学新聞部）である。紙面には、様々な方面での学生の自主的な活動の様子が、報じられている。一面上段には、「全日本女子学生の会結成——戦争は女子学生の独立をも阻む——」という見出しが見える。この年の六・二六大水害での被災に対する学生自治会による義捐金活動の記事も見える。さらに、二面は、第一回九州地区大学音楽会の開催、熊本学生演劇コンクールの再開を報じている。

昭和三十四年、五年の『熊本女子大学新聞』（発行所熊本女子大学新聞部）は、熊本女子大学の学生諸姉も、安保条約改定問題という日本の戦後史を左右した大問題と無関係ではおれなかったことを今に伝えている。昭和三十四年十二月十二日付けの『熊本女子大学新聞』第二〇号一面【写真三】は、「最終段階の安保改定、国民の一員として良識ある自覚を」と呼びかけ、「改定条約文」と「現行条約文」、さらに「政府側の云い分」と「破棄論側の云い分」を紹介し、条約改定の問題を真剣に分析している。新聞はまた、自治



会執行部と一般学生との溝の開きを歎き、自治意識の高まりをたびたび訴えてもいる。

同時に、この時期は、体育会サークルの活躍が眼を奪う。中でも、第二〇号の二面には、「バドミントン全国制覇、全日本学生選手権大会」という見出しが躍り、約六十校が参加した選手権大会において、熊本女子大バドミントン部が、秋山文子（文一）さん、山崎紀久子（文二）さん、川上（家三）さん、田島（家一）さんなどの活躍、伊藤基記先生の支援により、シングルス、ダブルス、団体に初優勝を遂げたことを報じている。また、文芸欄、書評欄もかなり充実している。「映評」は、アランドロン主演の「太陽がいっぱい」（昭和三五年九月二二日号）、「忘れな草」（昭和三

【写真四】



六年十月二日号【写真四】）、ニコラス・レイ監督「キング・オブ・キングス」（昭和三七年五月十七日）、ヒッチコックの「鳥」（昭和三八年十月七日号）などをとり挙げている。

『学報・熊本女子大学基本問題特集号』

柿村先生や佐藤先生が残された文書類の中には、大学が発行している『学報』もあった。その第七号は、昭和四八

年三月十日（土）の日付で、「熊本女子大学基本問題特集号」となっている。知事の諮問機関として設置された「熊本女子大学基本問題審議会」の答申（昭和四七年十二月）が全文掲載されている。それは、「熊本女子大学は建学の精神に基づき、県立の女子大学として存続し、そのより一層の充実発展をはかるべきである」という考えに立って、文政政学部一学部の大学を文学部と家政学部の二学部で改組し、充実を図るというものであった。

同『特集号』には、「答申」を歓迎する柿村学長の談話や、この「答申」に沿った学部学科の改革構想が各学科主任から様々に紹介されている。このように、答申が出された直後に、具体的な改革構想が各学科主任から公にされていることから、「審議会」での議論と平行して、学内での改革検討が既に深められていたことが分かる。

この改革構想は、オイル・ショックによる財政事情の悪化のため、ただちに実施されることはなかったようだ。しかしその分さらに検討を重ねる時間的余裕が生まれ、昭和五五年四月、本学の文学部と生活科学部への改組と、大江から現在地への移転として実現することとなった。

ところで、柿村先生は、「答申」を歓迎する談話の中で、いまだ「新校舎の敷地に関しては決定に至っていないので、「一般教育を始め各学科の充実」とともに、「校舎敷地の決定」にも「鋭意努力」する必要があると、校舎敷地の

選定をかなり心配されている。いつのことだったかは忘れてしまったが、柿村先生とお会いした折に、先生は、「実は、そんな風に言ったけれども、健軍の飛行場の跡地に移転することは、ほぼ決まっていた」と、いたずらっぽく苦笑いをしながらおっしゃっていた。

おわりに

このようにして本学は、大江から健軍飛行場の跡地（つまり現在地）に移転し、「文学部」が名実ともに誕生し、昭和五年から「文学部」としての歩みが始まることになった。この年からの文学部と本学の歩みは、私も一教員として関わってきたのであるが、日本語教育課程の新設、外国語教育センターの設置、大学院文学研究科（修士課程）の設置、共学の県立大学への移行と総合管理学部の設置、同時に文学部学科名称の変更、また設置基準の大綱化に対応したカリキュラム改革、そして文学部における総合文化コースの設置、環境共生学部を設置、アドミニストレーション研究科と環境共生学研究所の発足、そして今回の法人化した文学研究科博士課程設置など、改革に継ぐ改革の歴史であった。本誌の中で既に三木学部長や元吉教授が触れられているように、その中で文学部・文学研究科の充実が図られてきたのであるが、それは極めて多忙なものであった。また、この期間は、私にとっては学生の皆さんや先輩・同僚の先生、職員の方々との共同あるいは葛藤の連続であっ

た。授業や討議におけるそうした共同、葛藤から、個人的にも意義あるものを与えていただき、また色々と迷惑をかけてきただろうと考えている。それを教え挙げると相当な分量になるので、割愛することにする。

なお、本学の学生諸君の新聞部の活動は、その後どうなったのであろうか。詳しいことは分からないが、昭和五年（一九八〇年）本学が現在地に移転して、二、三年後『熊本女子大学学生新聞』が新たに創刊されたようである。手元には、その第二号（昭和五八年、一九八三年四月十三日）がある。本学が共学の熊本県立大学として歩みを始める平成六年（一九九四年七月一日）には、『熊本県立大学学生新聞』創刊第一号が発行されている。しかし、現在は、新聞部の活動は停止しているようである。大学というものは、その歴史も、半分以上学生の皆さんにかかっている。熊本県立大学学生新聞の再発行を期待したい。

（本学教授）

大学の歩みの中での一断面

— 未完の模索

元吉 瑞枝（ドイツ語圏文学）

一九六八年、世界では、大学の管理体制、研究教育体制への異議申し立てに端を発し、社会体制全般への批判にまで進んでいった学生運動のうねりが起こっていた。日本でも、私の母校の大学では、運動が全学に波及しつつあったが、そのような中、卒業式もないまま私は大学（大学院）での修学を了え、二十四歳で本学に赴任した。本学は当時、熊本女子大学という名称で大江（現、県立劇場の地）にあり、文家政学部という一学部（四学科）のみから成る小さな大学で、学生運動のさなかにあった母校とは対照的に、樹木の美しい静かな楽園のようだった。しかし、教師として教えるという初めての体験の前に、私の胸には常に（学生運動の中でも問われていた）「教育とは何か」という問いが去来していた。学生運動の波はその後全国に広がり、熊本も例外ではなかった。テーマの重点は、各地、各大学でさまざまに異なっており、その展開は多くの問題も孕んでいたが、私にとっては、教える者と学ぶ者の関係はいかにあるべきかということに集約されていた。時代の空気は、

一見静かな本学の学生たちの意識にも様々なかたちで作用していたように思われる。彼女たちは、授業や専門に限らない色々な問題を投げかけてくるようになり、私も多くの学生たちと対話や議論を交わしたが、それらを通して、大学や教師は、既存の知識を正確に伝えるという責務を負っていることは言うに及ばず、相互の交流から新たなものを生み出していくプロセスが何よりも大切であることを現場で感じ取っていくことができたのである。そしてそれが原点となつて、私の長きにわたる模索が始まった。

一九八〇年、大学は現在の地に移転し、同時に、文学部と生活科学部から成る二学部へと改組された。キャンパスも大学のシステムも近代化され、前時代的な要素を次第に払拭し、「普通の」大学に近づく途を辿ることになった。同時に、時代や地域の要請にも応えることがいつそう求められ、男女共学の是非が論じられ、「国際化」や「情報化」がキーワードとなった。情報教育関連科目の開講や文学部における日本語教育課程の新設のほか、一九九一年には外国語教育センターが設置され、同時に外国人教師も増員した。さらにその後、第二外国語に、これまでのドイツ語、フランス語と並んで、中国語と韓国語が開設された。また、九四年には、一学年の学生数二八〇名の総合管理学部が創設され、同時に男女共学になり、キャンパス内の風景も大きく変わった。その後環境共生学部も設置され、各々の学部

に大学院も設置された。他方、学内の外国人（英語）教師の身分をめぐる大学との係争という事態が起こったことも記しておかなければならない。そして、二〇〇六年、本学も国立大学や他の公立大学と同様に法人化に踏み切った。

さらに文学部では、二〇〇八年に大学院博士課程（日文専攻）の設置や学部の新カリキュラムの開始が予定されているが、それと並んで、教養科目と学部共通科目および教職科目の担当者で構成されていた教員組織「総合文化・教職部門」が解体されて、その教員が既設の二学科に分属することも決定している。

大学のこれらの改編は、いずれもその時点での社会の要請や時代の流れを背景としてなされたものであるが、より大きな枠組みやより長期にわたる時代の流れから見た場合に、それらが果たしてどんな意味を持っていた（いる）のかの解答は、必ずしもまだ出ていないものが少なくない。

西洋中世史の研究者であり、一橋大学学長や国立大学協会会長などを歴任し、「世間」という視点からの日本社会論でも注目された阿部謹也氏は、遺著となった『近代化と世間』（朝日新書、二〇〇六年、一〇四〜一〇五頁）のなかで、一九九一年の文部省（現・文部科学省）による、一般教育の大綱化の提言について、「大学の崩壊が人々の目に見えるようになったきっかけ」であったと指摘し、それに対してどの大学もその提言に基づいて制度の改革をするのが精一杯

で、「教養とは何か」という本質的な議論をしなかったことについて、「大学が思考するという重要な機能を停止したからにほかならない、その後独立法人化が進み、その傾向はさらに進んだ」と記している。たしかに、改編のたびごとに、大学はその対応に追われ、多くの議論や労苦が費やされたが、知のありかたを根本的に問うような議論にはならず、議論の前提として方向がすでに決まっていることが多かったことは否めない。まして、大学の知のありかたをめぐって、かつてのような学生や市民にも広がり得るような運動が起こることはなかった。大学も社会も大きく変わり、もはや誰も大学にそのようなことを期待していないようにみえる。けれども大学の中にいる者にとつては、依然として、知のありかたをめぐる人と人の関係や、大学の内と外の関わりがいかにあるべきかは、追求していくべき課題であり続ける。

一九八七年の九月から八十八年の八月にかけての一年間、私はドイツ（当時の西ドイツ）のボッフムにあるルール大学に研修滞在する機会を得た。それまでただ書物を通して名前を知っていたにすぎないハンス・ゲオルク・ケンパー教授に手紙を書き、当地における自分の研究テーマ「二十世紀初頭の表現主義の文学や芸術について」を告げただけで受諾の返事もらい、未知の都市、未知の大学へと赴いたのだった。そこでは、研究室の一隅に場所を与えられ、

ゼミへの参加や図書の利用をはじめ、研究に必要なほとんどすべてのことが、何の見返りも要求されることなく無料で利用できる。私はこの自由で寛容なありかたに驚いたが、それは彼らにとって自明のことだったのである。なぜならドイツの大学では、入試も授業料も存在せず、高校の卒業資格さえあれば、誰でも希望する大学で無料で勉学でき、学期ごとに大学を代わることもできる（近年授業料を徴収する州も出てきており、また大学の移動も住宅事情等で減少しているとのことであるが）ことにも示されているように、基本的に出入り自由のオープンな場であるからである。従ってキャンパスには、多くの世代や国籍の人たちがいて、ルール大学でも、寮のみならず、デパートやレストランや郵便局などがあり、さながら一つの街のようで、乳母車を押している夫婦に出会うのも日常の光景だった。そのような開放的な空気は、授業やゼミにも現れており、多くの国籍の学生たちがいて、学生たちが皆、大変積極的に、時に教師の発言を遮ってでも発言するのである。その一年間、私は「表現主義」関係の貴重な資料に接しながら研究に専念することができ、多くの教員や学生達と、その後も長く続いた交流をもつことができたが、大学の場以外からも、多くのことを体験し、学んだ。

たとえば、多くの街にある市民大学にも足を運んでみた。これは、一種の成人大学であるが、大学のような権威（右

記のようなドイツの大学の自由さや開放性は、知の府としての確固とした権威に基づいているがゆえに可能になったものともいえる）や形式にとらわれずつと自由で、講義内容も多様で、講師の資格も（無論何らかの自己申告やそれに基づく資格審査はあるのであるが、大学に比べて）比較的自由にみえた。何らかの知識や問題意識を有する人が、それを希望する人に（わずかの報酬をその場で受け取って）自由に分け与えるという、いわば、知をめぐる「物々交換」のような雰囲気があった。私の友人も講師をしており、彼女は、自分に関心のある歴史上の女性をテーマに講義したが、五、六人の女性がそれを受講し、その場で彼女に直接五マルク（当時約五百円弱）払っていた。このような市民大学の仕組みは、公的な支援があつて初めて成り立つものであるが、私はこのようなありかたに、教育の一つの原点を見たように思った。

そしてこのような教育のかたちは、日本でもその後ドイツの市民大学と同じ形のものではないが――生涯学習や地域の歴史や文化への関心の高まりと共に普及していった。そればかりか、本学でも、正規の授業を一般に公開する授業公開講座が一九九〇年から開講されたのである。正規の授業を利用したこのような公開講座は、「全国の国公立大学では三番目であり、女子大学でありながら男性の受講者をも受け入れる講座としては全国でも初めて」（『熊本県立大

『学五十周年史』一一七頁) だったという意味で先進的、画期的な試みであったばかりではなく、これまでの学校や大学における教育に付随していた、教育する者と教育を受ける者の年齢の長幼や人生経験の有無やそれに伴う権威性を両者の関係から否応なく(かつ自然なかたちで) 剥ぎ落とし、単位のために受講するのではない受講生を受け入れることで、授業そのものなかに単位制の外の世界へと通じる風穴を開けるものであったという意味でも意味深い試みであり、試練でもあった。当時の記録によれば、初年度の受講申し込み者は、定員一七三名をはるかに越える五六三名だった。私は、一九九〇年の四月、この授業公開が始まったときの教室の緊張と感動をいまでも忘れられない。それは、学生、社会人受講生、教員のいずれにとっても新たな第一歩だったのである。この授業公開講座は、いまでは日常の一齣であるように大学のなかに溶け込みながら、現在も続いている。

また受講生の側だけではなく、教える側においても、第二外国語に当該外国語を母語とする指導助手(のちに国際交流員)の制度が採用され、ドイツ語においても一九九一年から約十年間、六名の若いドイツ人女性が一年〜三年間来日し、授業をサポートすることによって、授業に拡がりとなり流動性が生まれ、何よりも生きたドイツ語圏世界への窓口となりえたのである。交流には、当然ながら、親睦だけ

ではなく、時に試練や葛藤も伴ったが、それこそ貴重な生きた異文化接触の実践だった。(この制度は、残念ながらその後廃止された。)

一九九〇年は、他の点でも、ドイツ語やドイツ文学に携わる者として、忘れられない意味深い年となった。言うまでもなく、同年十月に東西ドイツが統一したからである。すでにその前年の一九八九年に、旧東ドイツでの民主化を要求するデモについての報道が多くなり、十一月にはついにベルリンの壁が崩壊した。日本の大学生たちも、連日のメディアでの報道から何か強く心に感じるものがあつたのであろう。一九九〇年には、低落傾向にあつたドイツ語受講生の数が全国的に増加したとのことであり、本学でもその傾向が見られ、関心も高かった。そのような中で、旧東ドイツから(壁が崩壊する直前に)来日したロナルト・ライベルト氏に教室に来てもらってドイツの状況を学生たちに話してもらったことがある。ライベルト氏はその後、統一したドイツへも帰国することなく日本に留まり、本学の非常勤講師として現在に至っている。

私は、一九九〇年七月、ベルリンの壁崩壊の引き金となつた前年のデモの主な舞台だったライブツイヒへの短期研修を、日本独文学会を通して申請し、その推薦を受けて同地へ赴き、前年の月曜デモに参加した人たちにも出会って話を聞くことができた。ライブツイヒへ行く前に寄つたベル

リンでは、東欧からやってきてツオー駅の前に野宿している無数の人々の群を目にして驚嘆したが、その後、東欧の社会主義政権も相次いで崩壊し、一九九一年末にはソビエト連邦も解体した。これら一連の出来事は、改めてドイツの戦後史や東西冷戦時代についての考察を迫るものであったばかりではなく、その後の世界を如何にとらえ、そのなかで如何に生きるかという根本的な問いを孕んだものでもあった。

冷戦構造が崩壊した一九九一年に、旧ユーゴスラビアで内戦が勃発した。ヨーロッパでは、ドイツ統一後、EUの東方拡大に向かって歩みが進められていったが、他方で、ユーゴ内戦がその後約十年にわたって続き、NATOによる介入や空爆等も経て、膨大な死傷者を出して旧ユーゴスラビアが解体したことも銘記しておかなければならない。当時の私にとっては、旧ユーゴスラビアは全く未知の世界であったが、その後、愛読していたオーストリアの作家ペーター・ハントケを通して、彼のユーゴスラビアに関わるテキストを読み、さらにそれを翻訳するに至り、当地へもみずから何度も足を運ぶことになり、これまで主に関わってきたドイツくヨーロッパをその周縁や他者の視点で見直すことをいっそう迫られたのである。また、九十年代には、ドイツで知り合った若い研究者が、みずからの研究対象であるソネットと日本の短詩型である俳句・短歌との比較に

関心を抱いて来学したのを受け入れたことや専門外の多くの社会学者との出会いがあり、それらを通して研究の面でもおのずと拡がりが求められ、同時に、みずからの拠って立つ基盤を改めて問題にせざるを得なくなったのは、必然の成り行きであった。

以上は、私が本学に赴任してからの長い年月のあいだに起きたことのごく一断面にすぎない。そのあいだには、ここには書きつくせなかつた多くのこと、多くの出会いと別れがあった。そして大学の中での私の長い歩みもまもなく終わりを迎えようしているが、私の原点と模索は（形を変えながらも）未完のまま、まだ続いている。

（本学教授）